今月の読み物

巨樹・巨木シリーズ-19
山梨県の巨樹・巨木

細田木材工業株式会社
顧 問　　細 田 安 治

４か月お休みさせていただきましたが今月号から再開します。よろしくお願いいたします。

休むと「今まで気づかなかったこと、見えなかったことが見えてくる」と、新鮮な気持ちで取り組んで参りたいと思います。

さて、山梨県の巨樹・巨木を読み返すと、山梨県が正に巨樹・巨木の宝庫であることに感心した。そこで今号では、樹種は針葉樹の直材であるスギとヒノキ、カヤと、モミの４種を選んだ。

スギは樹齢1000年、樹高30m～50m、樹周８～10mを擁する巨樹があり、名実ともに針葉樹の横綱であることを今更ながら再認識した。休むと気づかなかったことに早速気がついた。

では、資料提供してくれている探索者U氏の足跡を追いながら進めていく。

写真番号１

北口本宮冨士浅間神社の大スギ

樹齢1000年　樹周9.4m　樹高36m　富士吉田市上吉田5558　山梨県指定天然記念物

本樹は樹齢1000年ぐらいと言い伝えられている。本殿を見守るようにすくっと真っすぐに立ち上がる姿には、ご神木の名に恥じない荘厳さがある。

また、漏斗を伏せたような根張りが実に美しく広がっている。山梨県を代表する巨樹として、山梨県指定天然記念物第１号となったのもうなずける。「冨士太郎」と呼ばれ、広く市民に親しまれている。

南側付近の損傷部分は昭和34年の７号台風により被害を受けたものだが、「雷落ち」にあってもびくともせず、巨木のもつ威容であたりを睥睨している。その一方、御幣を従えた細縄の蝶結びのしめ縄によってなんとはなしに愛嬌があり、親しみがもてることから「冨士太郎」にふさわしい雰囲気を持つ巨木と評価した。

なお、本殿裏手には樹高30m、樹周7.8mの「冨士次郎」がある。こちらもきれいに根が張っている。

この周辺には大きな根張りをもつ巨木が多い。富士山の噴火による火山灰に埋もれていた根が長年の風雪により吹き飛ばされ、根がむき出されたのではないかと考えられている。

写真１　北口本宮冨士浅間神社の大スギ

写真番号２

河口浅間神社の七本スギ

樹齢1200年　樹周9.6m　樹高52m　南都留郡富士吉田河口湖町河口１

この七本杉の内どのスギが主木なのか。個性の違う７本の巨木はそれぞれ名前をもち、１本ずつ囲いで根元を守られ、しめ縄で清められている。どの木が大将なのかわからない。筆者の想像でこの７本の一群がすべてご神木であり７本がまとまって神様をお守りしているのではと勝手に解釈した。

７本のスギにはそれぞれ違う個性が見える。節の無いすらっとしていかにも育ちの良い木、その隣合わせに同じ土で育ったのに、どうしてこんなに違うのかと思うほどゴツゴツした節だらけの木がある。立ち位置のわずかな違いにより日の当たり、風当りが変わり、このような違いを生み出したのだろうか、 不思議なことだ。

写真２　河口浅間神社の七本スギ

写真番号３

精進諏訪神社の大スギ

樹齢推定1200年　樹周7.03m　樹高42m　南都留郡富士河口湖町精進　上九一色村指定天然記念物

社殿が富士河口湖町指定文化財である。以下は案内板および富士河口湖観光情報サイトなどによる。「現在の本殿は一間社の流れ造り柿葺の建て物で天保14年(1845)に再建されたものである。この建築の特徴は、随所に施された装飾彫刻で、その装飾の題材も動植物から中国の故事に至るまで多岐にわたり、豊富な意匠に加えて優れた彫技は江戸時代末期の装飾過多になる社寺建築の動向を踏まえながらも、全体的な均衡を意図された貴重な遺構である。覆屋は明治39年(1906)に設けられ、本殿を保護するとともに、拝殿の役目をはたしてきた」

この大スギも、社殿の目の前にそびえ立ち、由緒ある社殿を守護するかのようである。緑の葉が青々としげり、とても1200年の樹齢をもつとは思えない、壮年期を思わせる大スギである。

写真３　精進諏訪神社の大スギ

さらには、この諏訪神社には、国の天然記念物にもなっている「精進の大スギ」がある。つまりスギの巨木が、同じ神社にわずかな距離をあけて２本並んでいるという。しかもどちらも1200年の樹齢をもつといわれている。驚きというほかない。

写真番号 4

北口本宮富士浅間神社のヒノキ

樹齢1000年　樹周8.7m　樹高33m　富士吉田市上吉田5558　富士吉田市指定天然記念物

すでにご紹介した北口本宮冨士浅間神社にはヒノキの巨木もある。真っすぐに天を突くヒノキの威容、しかも合着木、山梨県下でも最大のヒノキの巨樹である。このヒノキは姿かたちが美しく、その上仲の良い夫婦を思わせるように合体していて、いかにも微笑ましいヒノキである。ヒノキの根元は一つで途中で二つに分かれ、また地上約12mで再び合着していることから、「富士夫婦杉」と呼ばれ、広く市民に親しまれている。根張りが著しく発達し漏斗を伏せたような形になっており、枝は上部で四方によく伸びている姿はたいへん見事である。

写真 4　北口本宮冨士浅間神社のヒノキ

写真番号 5

白須若宮八幡神社のモミ

樹齢300年以上　樹周6.11m　樹高20m　北杜市白州町白須1598　白須町指定天然記念物

まっすぐ立つモミの木は一見していかにも針葉樹として太く落雷により内側は焼けた跡があるが雷なんのそのでありどっしりと大地に立っている。以下は案内板より。「地上6.6mで幹が折れそこから南方向に枝を出し、よく見るとその上に細い枝が一本立っている。落雷のため幹の内部は空洞になっているが南側の幹の外側は下から上までかけているが樹勢旺盛にして衰えを知らず県下でもまれにみるモミの巨樹である」

この巨樹の持つ生命力と迫力は視る人になにものにも負けない力を与えてくれるものではないか。

写真 5　白須若宮八幡神社のモミ

写真番号６

カヤの群落と大フジ

北杜市白州町花水1461　白須町指定天然記念物

カヤの群落とフジが絡み合う植物学上貴重な木々である。カヤはヒノキ、モミなどと同じ針葉樹であるが、姿かたちも興味深く取り上げた。以下は白州町教育委員会の案内板より。

「カヤは岩手、山形以南の主として温帯林のなかに分布している散生でこのように大木が群生するのは珍しい。群生の規模は目通り幹回り１ｍ～３ｍものが16本である。またフジはマメ科のつる性の落葉樹で各地にみられるが、このフジは巨樹であることとかつて２本であったものが成長して現在は８本に分かれこのフジの木の特徴を表している。驚くべきはこのフジの目通り幹回りが最大で1.85mある」

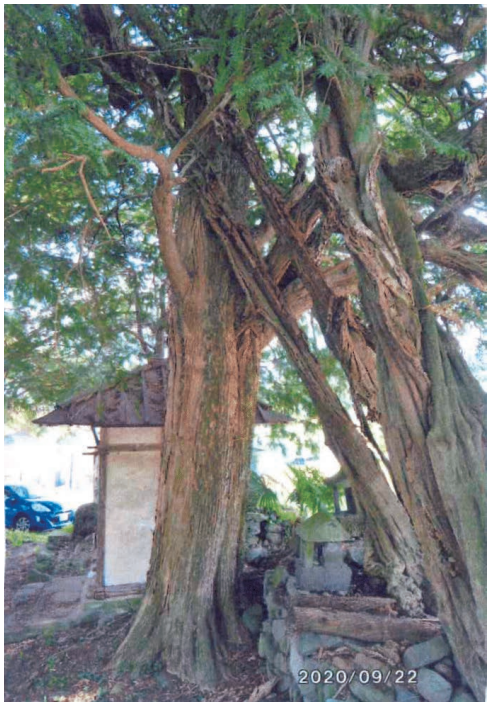

写真６　カヤの群落と大フジ

この樹を取り上げたのはカヤとしてだが、カヤを探しているうちに、フジの絡み合うアートのような樹木に出会えた。こんな珍しくも不思議な樹木は、自然のもたらす造形のいたずらではないだろうか・・・

ここで針葉樹のスギ、ヒノキ、モミ、カヤについてのこぼれ話を。

●スギ

日本で最も広く植林されていて、面積では人工林の45％、全森林の18％にも達している。日本国内には、多数の産地があり産地ごとにそれぞれブランド化されている。樹から木となり、建築、家具、樽、土木などあらゆる方面に使用されている。

スギの名は真っすぐに成長する木「直木（すぐき）」「すくすく育つ木」が由来と言われている。思い出したのは、小学生のころの唱歌に「スギを植える唄」があった。「丸々坊主のはげ山は、いつでもみんなの笑いもの、これこれ杉の子おきなさい。お日様ニコニコ声かけた。声かけた」このような歌詞であったと思う。

戦中から戦後にかけて日本中こぞってスギを植えていた時代があり、現在でも植林にはスギが数多く植えられている。しかしこのスギの花粉が春を前に多くの日本人を悩ませている「花粉症」を引き起こす一因となっている。

これに対し林野庁では花粉の少ない品種を研究し、少花粉のスギ147品種、少花粉のヒノキ55品種を開発したとのことだ。

●ヒノキ

語源は様々ある。木をこすって火を起すのに使われたので「火を起こす木」「火ノ木」、お日様を表す最高の木「日の木」とする説がある。スギとともに、日本を代表する素晴らしい木であることは、樹から木になっても変わりはない。尚、人工林の内25％はヒノキである。

●モミ

モミの語源は、葉が柔らかく「もめる」ことから来ている。また、神聖な木として「臣（おみ）の木」から来ているとも言われている。モミは樹から木に代わると消臭効果などがあることから、古くから死者の眠る木とされ、死者を悼む葬儀に使われている。またクリスマスツリーにもモミが使われている。これはモミが針葉樹で、厳冬のあいだも緑を保つため、永遠の象徴とされていたことから、この木に花などを飾るようになったと言われている。

●カヤ

ご存じ碁盤将棋盤の材料として有名である。立ち木から手掛けなければ用材は手に入らないと言われている。木の素性を見抜き、丸太にしてから養生に長期間を要すること、木取りは、すべて木を知る木挽きの手により行われるが、肝心の木挽き職人は数少ない。このような現状からカヤの木を扱う業者は限られている。　続く